

# さくらんぼ

自ら動き、感じ、楽しむ  
～笑顔あふれる幼稚園～



NO.7 令和4年2月21日発行  
山口大学教育学部附属幼稚園  
URL <http://www.ymg-kg@yamaguchi-u.ac.jp>

お正月遊びのこま回しや凧あげをして楽しんだ1月は、あっという間に過ぎ、早いもので2月も後半になりました。毎朝、ピオトープやカップに入れた水が凍っているか確認する子どもたち。寒さを楽しみに変える子どもたちの姿がありました。



## みんなを驚かせたいな！(花組)

3学期に入り、花組では鬼滅の刃ごっこや学校ごっこ、工事ごっこなどいろいろなごっこ遊びを楽しんでいます。今までは“先生と”が多かった子どもたちですが、段々と“友達と”が楽しくなっています。ごっこの中身は変わっていても、「私も入れて」「〇〇くん一緒に遊ぼう！」と遊びの輪に加わったり「〇〇ごっこする人この指とまれ！」と友達を誘ったりする言葉が多く聞かれるようになりました。



ある日、裏庭の砦を使って子どもたちがおばけになって遊んでいました。降園時に「あー、楽しかった！もう一回したいね。」「次は部屋の中でおばけ屋敷やりたい！」という声が上がってきました。そこで『おばけのもり』という絵本を読むと、子どもたちはがいこつやひとつめ小僧などのおばけに興味津々になっていました。次の日、昨日のことを思い出した子どもがおばけのお面やがいこつの骨をつくって身に着けていきました。おばけが隠れる場を準備すると、早速隠れてみたり「ヒーヒヒヒ！」と怖い声をあげたりして遊びはじめます。おばけ屋敷＝暗いと思った子どもが何も言わずに部屋の電気を消しました。わー！と喜ぶ子どももいれば、急に消されて不安になる子どもも…。楽しいおばけの子どもたちは、周りのことには気づきません。「ちょっと、みんな聞いて。泣いている友達もいるよ。」と声をかけると、あっと何かを感じ取ったように静かになりました。「今作ってるのに消さないで。」と泣いているAちゃんの言葉を聞いて急に消したら嫌な友達もいると知り、次からは「電気消していい？」って聞くことにしようとなりました。その後はクラスのいろいろな友達を誘っておばけ屋敷に来てもらい、おばけになりきって驚かせることをとても楽しんでいました。みんなを驚かせることが楽しいのですが、楽しいばかりではなく、「さっきのは怖すぎた！」「ぎゅってしてほしくない。」などお客さんからの不満も出てきます。その度に保育者と一緒に相手の思いを考えながら、そろりと出てきて小声で驚かそうとやり方を変える姿もありました。このような経験を重ねながら、自分が楽しいだけでなく、相手の

ことも考える機会につながってほしいなと思っています。おばけ屋敷ごっこはしばらく続き、チケットをつくってみんなに配ったり、おばけの家に連れていかれないように逃げることを楽しんだり日に日に面白くなっていました。子どもたちの遊びもどんどん面白く、充実したものになり、3学期の成長を感じています。(高橋)

## 友達がいるから楽しいよね(風組)

保育室では、カルタや絵合わせカードを囲んで丸くなって座り、「私の名前『ま』だ。」「17枚も取れた。」と嬉しそうにしていたり、「次の1枚は自分がとるぞ。」と真剣な表情になっていたりと、様々な表情を見せていた子どもたち。すぐろくでは、「次はAくんの番だよ。」と知らせたり、友達がコマを進めるとき一緒に数えたり、マスに書いてある文字を友達の分まで読んだり、ゴールを目指しての競争ですが、協力しながら遊ぶ姿に温かい気持ちになりました。いつも元気いっぱい、戸外で遊ぶのが大好きな風組さんが、カルタやこま回し、他にもすぐろくや絵合わせカードなどにこんなに夢中になるなんて、子どもたちの新たな一面を知ることができました。



園庭では、氷鬼が始まると、クラスや学年に関係なくたくさんのお友達が集まってきました。「こっちは鬼が登ってもいいけど、こっちはダメなことね。」とルールの確認をして氷鬼が始まります。鬼になっていたAくんが、「タッチしたよって何回言っても、Bちゃんが固まってくれん。」と困った様子で保育者に言いに来て、みんなでBちゃんに話を聞いてみることになりました。Aくんが「さっき僕がタッチしたのに、なんで固まってくれなかったん？」と言うと「固まったよ。それで、自分で溶かせるってことで逃げたんだよ。」とBちゃん。一緒に鬼をしていたCくんが「でもさ、それじゃ鬼が大変じゃん。」と続けます。すると、Dちゃんが「私もBちゃんの考えたのいいと思ったよ。」とBちゃんに賛同します。「え、でもそれじゃ氷鬼じゃない。」とAくん。平行線のまま会話は続きます。保育者が「いろんな逃げ方があっていいと思うけど、逃げ方が変わったの鬼は知らなかったからね。変えたいときはみんなに知らせてからがいいと思うよ。」と言うと、一緒に鬼をしていたEちゃんも「私も知らなかったよ。」と言いました。Cくんが「なんで逃げ方を変えたいの？」と聞くと、Bちゃんたちはアスレチックのかけになったところで固まっていたけど、なかなか助けが来なかったと話始めました。その話を聞いたCくんが「大きい声で、助けてって言ったらいんじゃない？」と言い、Bちゃんたちも「わかった。」と笑顔で受け入れ氷鬼が再開しました。

友達の言っていることを聞いて自分の考えを言ったり、友達の思いを聞こうとしたりする姿が増えています。子ども同士の会話が、友達と一緒に楽しく遊ぶための会話や意見の伝え合いになってきていることに成長を感じています。友達への気持ちが優しく大きく育っていると嬉しくなりました。(中原)

## これまでの体験を活かして楽しむ(星組)

星組では、進学を前に給食体験をしたり、年中児にウサギのお世話の仕方を伝えたり、「もうすぐ小学生」という気持ちが高まっているように感じられます。残り少ない園生活を遊びつくそうとするように、これまで楽しんで遊んでいた遊びを思い出して、さらにまた楽しむ姿が見られます。クリスマス会で劇を中心になって進んでいた女児たちが、「また劇がしたい。」と友達同士で相談し始めました。「お姫様が出てくる劇がいい。」ということはすぐに共有され、保育室にある昔話の本でいい話がないかを探していました。その中でお姫様が出てくる話「いばら姫」を見つけ、「これがいい」と話が進み、保育者がその絵本を降園前の集まりの時間に読むことになりました。クラスみんなに女児たちが「いばら姫」で劇をしたいことを伝えてその絵本を読みました。絵本を見ながらどんな役があるかを確認していたのか、絵本を読み終えるとA子が「だれか王子様してくれる人いませんか？」と男児たちに聞きました。誰も手を挙げませんでした。保育者が「劇を手伝ってくれる人を募集するってことだね。」と言い、どんな役があるかを確認しました。「お妃、お姫様、妖精、王様、王子様」といった役以外に、「お話を読む人、司会の人、いろいろ手伝う人」などの役割がいることが子どもたちから出ました。明日から練習するということが決まり、準備が始まりました。



翌日、お妃、お姫様、妖精、司会の役はすぐに決まりました。王子様は女児たちが男児に個別に頼んでいましたが、見つからず、S子ちゃんが「なってもいいよ。」と自分で絵本に描かれていた飾りのついた王子の帽子をつくり、マントを付けてなりきって見せ、女児たちが喜びました。楽しい雰囲気でお妃たちが準備をしていると男児たちがお客用の席に座って見ていました。そのうちに女児たちにもお願いされ、お城の人役や、妖精役をする男児が増え、配役が埋まっていきました。それぞれが衣装をつくったり、舞台を準備したり、セリフを練習したりしていきました。年下のクラスに見せる前に、降園前の時間にクラスで劇を披露することになりました。見た後にどこがよかったかや、もっと工夫したらよいところはどこかをみんなて話をしました。妖精のセリフが聞こえにくかったという意見が出て、子どもたちみんなと一緒に練習すると、翌日には妖精役の子どもが増えていました。劇にお客を呼んでは、何度も披露する日が2、3日続きました。小さい友達に喜んでもらい満足していたので「今度はお化け屋敷をしよう」という意見が出て、さっそく翌日から準備が始まりました。お化け屋敷は秋まつりでやったり、小学3年生との交流でお客になったりしてイメージがもっていたのですぐにクラスのみんな準備を始めました。隣のクラスの友達もペーパー劇や探検コーナーに加わって、遊戯室に楽しい遊びのコーナーがあつという間にでき、年下のクラスを招いて楽しみました。このような友達と力を合わせて楽しんだ経験がきっと小学校で活かされることでしょう。(高田)